

ギヤスケルが描くブランウェルの死

芦澤久江

1. はじめに

ギヤスケルが書いた『シャーロット・ブロンテの生涯』(1857)はイギリス伝記文学としてだけでなく、当時の女子教育においても大きな功績を残し、1880年代には、シャーロットは世界の尊敬すべき人物としてジャンヌ・ダルク、エリザベス I 世、ヴィクトリア女王と肩を並べるに至った (Miller 80)。しかしギヤスケルがシャーロットを聖女として描こうとしたため、いくつかの事実が歪曲されることになった。よく知られているように、父親のパトリックや弟のブランウェルはその犠牲となったのである。

ギヤスケルは『シャーロット・ブロンテの生涯』執筆中、訴訟を覚悟でブランウェルとロビンソン夫人のスキャンダルを描き、そのうえブランウェルがいかにシャーロットを悩ませ、一家のお荷物であったかということを強調した。ギヤスケルが予測していた通り、ロビンソン夫人から抗議に遭い、第一版から三週間後に出版された第二版(1857)において、ギヤスケルはブランウェルとロビンソン夫人のスキャンダルに言及した部分を削除することを余儀なくされ、その騒動についてはいったん収束したように思われた。

一方シャーロットの友人エレン・ナッシーは、ギヤスケルの伝記に満足はしていなかった (Whitehead 219)。なぜならシャーロットの人生があまりにも暗く描かれていたからである (Whitehead 219)。エレンは自分自身でシャーロットの伝記を書こうと思いついたが、力量不足のため断念せざるを得ず、ウィムズ・リードに多量の手紙を提供し、シャーロット像を描き直してもらうことを選択したのである (Whitehead 219)。エレンに頼まれたリードはシャーロットだけでなく、酷評された父親パトリックについても修正を加えた。しかしブランウェル像については修正を施さないまま、リードもまたブランウェルをブロンテ家の「暗い影」として描いている (90)。さらにメアリ・ロビンソンが追い打ちをかけるようにブランウェルのスキャンダルをふたたび蒸し返し (119-24)、ブランウェルの評判を陥れた。こうした状況のなか、ブランウェルの友人フランシス・レイランドはブランウェルを擁護するために立ち上がった。レイランドはギヤスケルの描いた自堕落なブランウェル像

を否定し、彼の才能を強調して、これまでのイメージを払拭しようとした。それどころかレイランドは、ブランウェルの友人デアデンやグランディの証言を基に、『嵐が丘』の作者はブランウェルであるとさえ主張したのである(2: 184-89)。レイランドのこうした努力も空しく、その後ブランウェル像が大きく修正されることはなかった。

現在ではギヤスケルによって、「酒浸りの放蕩息子」「ブロンテ家のお荷物」というブランウェル像が定着している。またブランウェルの死に関しても、ロビンソン夫人に失恋したことが原因だったというギヤスケルの説が一般的なものとなっている。

ブランウェルは一見気ままに生きていたように見えるが、彼の詩作品を読んでもみると、彼の懊悩は深く、単なる「酒浸りの放蕩息子」ではないことがわかる。実際グランディは、ブランウェルの手紙にはブランウェルの苦悩が綴られていたと述べている(92)。そこで拙論ではブランウェルの詩作品を通して、ブランウェルの苦悩がいかなるものであったかを考察するとともに、ブランウェルの死について再考してみたい。

2. 画家か詩人か

まず、ギヤスケルがブランウェルの少年時代をどのように描いているか見てみよう。ギヤスケルは子どもの頃のブランウェルについて次のように述べている。

Patrick Branwell, their only brother, was a boy of remarkable promise, and in some ways, of extraordinary precocity of talent. (1: 111)

子ども時代のブランウェルについてギヤスケルは将来は前途有望であり、驚くほど才能があったということを認めている(1: 111)。やがてブランウェルの才能は村人にも知れ渡り、その結果彼の才能は人々を楽しませるために使われるようになったとギヤスケルは述べている。

He was now nearly eighteen; it was time to decide.... The father, ignorant of many failings in moral conduct, did proud homage to the great gifts to his son; for Branwell's talents were readily and willingly brought out for the entertainment of others. Popular admiration was sweet to him. And this led to his presence being sought at 'arvills' and all the great gatherings, for the Yorkshire men have a keen relish for intellect; and it

likewise procured him the undesirable distinction of having his company recommended by the landlord of the Black Bull to any chance traveler who might happen to feel so solitary or dull over his liquor. (1: 153-54)

ギヤスケルによれば、ブランウェルは18歳のときにすでに居酒屋に出入りしていて、彼の早熟な才能は人を楽しませるために使われていた。というのもブランウェルの語りの才能は天才的だったので、旅人たちを楽しませるために彼は教会前の居酒屋「ブラック・ブル」にしばしば呼び出されていたからである。ギヤスケルはこのエピソードを持ち出して、ブランウェルは早くから居酒屋の雰囲気慣れ親しんでいたということを強調した。司祭の息子が18歳にして居酒屋に出入りしていたとは通常は考えられないが、父親のパトリックは子どもたちに無関心だったため、ブランウェルが居酒屋に出入りしたことを知らなかった(*Life* 1: 154)。このエピソードの情報源は明らかでない。レイランドは実際にこの真相を確かめようと、村人に聞いて回ったが、そのようなことを証言した人物はいなかったと述べている(1: 90-91)。今となってはこれについて真相を確かめることはできない。しかしギヤスケルはブランウェルが早くから居酒屋に出入りし、やがては酒浸りになって墮落していくことを暗示しているのである。

ブロンテ家ではブランウェルの才能を誰もが認めていた。レイランドによれば、ブランウェルの才能は想像以上に多岐に渡っていた。ブランウェルは子供時代、ボクシングに夢中になっており、ギリシャ語、ラテン語に精通していた(*Leyland* 1: 118-19)。また音楽も得意でオルガンを弾くことができたし、両手で同時に文字を書くという特技も持っていた(*Leyland* 1: 119-20)。このように才能あふれるブランウェルはブロンテ家の希望の星であった。ギヤスケルが述べているように、姉妹は特に、ブランウェルの絵画の才能を高く評価していた(1: 155)。そしてブランウェルは家族の期待を背負い、画家への道を歩んでいくことになったのである。

なぜパトリックがブランウェルを画家にさせたかったのかは明らかではない。ギヤスケルもレイランドもそのことについては触れていない。父親が聖職者であるから、聖職を継がせるのが自然なことかもしれないが、そうした選択をしなかったのはパトリック自身が聖職にそれほど関心を持っていなかったからではないであろうか。また才能豊かな息子を見て、過大な期待を寄せ画家として大成すると信じ込んでしまったのかもしれない。画家になるという計画はブランウェル自身も同意してのことであろうが、ブランウェルは本当に画家になろうとしていたのか、そこには

葛藤がなかったのか、ギヤスケルは詳細を語っていない。

次の場面でギヤスケルは、一家がブランウェルを画家にさせるため、ロンドンのロイヤル・アカデミーに送り出すことになったと述べている (1: 155)。ギヤスケルが引用した 1835 年 7 月 6 日付のシャーロットの手紙には明らかにその計画が示されている (1: 156)。また 1835 年夏にブランウェルがロイヤル・アカデミーに入学志願のために書いた手紙の下書きが残っていることから (Barker 226)、その準備が行われていたことは確かである。

しかしこの計画は断念せざるを得なかった。一般的には、ブランウェルはロンドンに出かけたが、自分には才能がないことを知り、持っていた授業料はすっかり酒代に代わり、ハワースへ舞い戻ってきたと言われている。友人のレイランドは、ブランウェルはロンドンへ行くには行ったが、ブロンテ家の財力ではロンドンでの画家修業を支援し続けることができなかったか、あるいはブランウェルがロンドンでさまざまな画家の絵を見て圧倒され自信を失くしたのではないかと推測している (1: 144-45)。バーカーは、レイランドは友人であっても、ブランウェルのことをそれほど知っていたわけではなく、もし知っていたとしてもレイランドはブランウェルがロイヤル・アカデミーに入学したとは一言も言っていない、と指摘している (228)。理由は定かではないが、ブランウェルがロイヤル・アカデミーに入学しなかったのは事実のようである。

ギヤスケルは、ロイヤル・アカデミー計画の放棄について次のように語っている。

I am not aware for what reason the plan of sending Branwell to study at the Royal Academy was relinquished probably, it was found, on inquiry, that the expenses of such a life were greater than his father's slender finances could afford, even with the help which Charlotte's labours at Miss Wooler's gave, by providing for Anne's board and education. I gathered from what I have heard, that Branwell must have been severely disappointed when the plan fell through. (1: 196)

ギヤスケルが推察しているように、ブランウェルはこの計画断念により、どれほど絶望したことであろう (1: 196)。ブロンテ家はブランウェルに本格的な絵のレッスンを受けさせるだけの財力を持っていなかったため、彼の画家修業は中途半端なものにならざるを得なかった。それはブランウェルにとって悲劇であった。ロイヤル・アカデミーに行く代わりに、ブランウェルはウィリアム・ロビンソン氏から絵

を直接学ぶことになったが、ロビンソン氏に支払う絵のレッスン代は、一回の訪問につき2ギニーであった。そうなるレッスン代の出費が嵩み、そう度々ブランウェルはレッスンを受けることができなかった。そのためブランウェルはリーズのブリゲイトに下宿してロビンソン氏からレッスンを受けることになり、その後ブラッドフォードでアパートを借り、そこでアトリエを開いたのである。

だが肖像画を売って生活の糧にすることはできず、ブランウェルはハワースへ再び戻ることになる。ギヤスケルはブランウェルが描いたブロンテ姉妹の絵を見て、「似ているという点では賞賛すべきものであったと思う」(1: 155)と述べている。しかしレイランドはブランウェルが顔料の混ぜ方、使い方を習得していなかったため、肖像画に必要な光と影をうまく作り出すことができなかったと指摘している(1: 135-36)。

ギヤスケルが見たというこのブランウェルの絵は、現在ロンドンのナショナル・ポートレート・ギャラリーに飾られている。この絵を見れば、レイランドが述べたように、光と影が鮮明ではなく、ブランウェルが絵の初歩的な技法を学んでいなかったということがわかる。たとえブランウェルが絵画の基礎を学んでいたとしても、彼の絵は時代遅れになっていたであろう。ヨーロッパではまもなくセザンヌ、ゴッホ、ゴーギャンなどによる後期印象派の絵画が登場しようとしていた。それゆえ彼がヨーロッパに留学していたら、絵画も洗練されたものになっていたかもしれないが、そのような金銭面の余裕がブロンテ家にはなかった。イギリスの片田舎の画家のもとでレッスンを受けるのが精いっぱいだったのである。

ブランウェルはロイヤル・アカデミー計画断念に続き、再び挫折を味わった。このときブランウェルは自分の将来についてどのように考えていたのだろうか。実は、ブランウェルはブラッドフォードのアトリエを引き払う前に、詩を書いていた。ブランウェルはこの時点で画家になろうか詩人になろうか思い悩んでいたのではないだろうか。父親からは画家になることを期待されていたが、ブランウェル自身は詩人として大成することも決してあきらめてはいなかった。アトリエでの挫折のあと、ブランウェルは少しでも生活の糧を得るため、家庭教師の道を歩むことになったが、それでも詩作を続けていたのである。

1839年12月31日ブランウェルは家庭教師としてブロートン・イン・ファーネスのポスルスウェイト家へ赴くことになった。家庭教師先からの眺めをブランウェルは「ブラック・コウム」(*Poems* 310)という詩に描き、家庭教師のかたわら詩人としての夢を追いつづけていた。またブラッドフォード時代に書いた「サー・ヘンリ・

ターンストール」(*Poems* 240-53)という詩とともにホラティウスの「オード」の翻訳もド・クインシーに送り、指導を仰いでいる。不運なことにド・クインシーはそのとき病気があったため、ブランウェルは返事をもらうことはできなかった。それでもくじけずにブランウェルはワーズワースにも詩を書き送ったが、ワーズワースからも返事はなかった(*Life* 1: 167-68)。

結局この家庭教師先からブランウェルは解雇されることになった。その理由は定かではないが、子どもたちに何も教えないという職務怠慢のためか、あるいは泥酔した姿を雇い主のポスルスウェイト氏に見られたからだと言われている。しかし前述したように、家庭教師の仕事をしながらも、彼は自分の詩を方々に送り、詩人として大成することを夢見ていたのである。

家庭教師を解雇されたあと、鉄道職員としてブランウェルはサワビーブリッジやラデンデン・フットに赴任したが、ここでもまた居酒屋に入り浸りであったと言われている。だが彼はラデンデン・フットに在職中、地方新聞ではあるが、『ハリファックス・ガーディアン』に「天と地」(*Poems* 210-11)という詩作品を発表した。早々とブロンテ姉妹よりも先に詩人としてデビューしていたのである。このとき彼は自作の詩が公表され、意気揚々としていたであろう。家族から画家になることを期待され、その道を素直に歩んできたブランウェルだが、その間もずっと詩作品の創作に情熱を傾けていたのである。

ブランウェルは最初、家族の期待通りに画家の道を歩んでいたが、ロイヤル・アカデミーの計画断念、ブラッドフォードのアトリエからの撤退を通して、画家よりも詩人の道を模索していたのではないであろうか。それゆえ家庭教師をしながらも詩作に打ち込み、地方新聞に彼の詩が掲載されたときはさらに一層詩人として成功をすることを夢みたにちがいないのである。

3. 詩作品

ギャスケルはブランウェルがなぜ大成することができなかったのかということについて次のように分析している。

There are always peculiar trials in the life of an only boy in a family of girls. He is expected to act a part of life; to do, while they are only to be; and the necessity of their giving way to him in some things, is often exaggerated into their giving way to him in all, and thus rendering him utterly selfish. (1: 197)

ギヤスケルはブランウェルがみんなに期待され、そしてまた甘やかされた結果、わがままになったと指摘している(1: 197)。確かにギヤスケルの言うとおりである。ブランウェルの才能はブロンテ姉妹よりも優れていたことはブロンテ家の誰もが認めていたことである。ギヤスケルが指摘しているように、ブランウェルは才能を持っていたにもかかわらず、周りから甘やかされ(1: 197)、自滅していくことになり、「放蕩息子」の典型としてレッテルを貼られることになる。しかしブランウェルの詩作品を読むと、母親を失い、姉を失い、支えとすべきものが失われてしまったという喪失感を彼がずっと抱き続けていたということがわかる。

ブランウェルの苦悩とは姉マライアを失ったという喪失感から始まっていると思われる。ブランウェルの詩作品には、マライアをモデルとした三人の人物が登場するからである。「マライア」「キャロライン」「メアリ」である。これら三人の人物はいずれも作中で亡くなっている。

シャーロットもマライアの死を忘れられず『ジェイン・エア』(1847)のなかで、マライアをモデルとしてヘレン・バーンズを描いたということはよく知られている。しかしブランウェルはシャーロット以上にマライアの死に強い衝撃を受けていた。

マライアは幼いながらも亡くなった母親代わりとしてきょうだいの面倒をよく看ていたと言われている。またマライアは頭脳明晰で父親のパトリックも期待をかけていたようである。そのためブロンテきょうだいにとってマライアが亡くなることは母親の死よりも悲しい出来事であったのである。マライアが亡くなったのはブランウェルが8歳のときのことであった。彼女はカウアン・ブリッジでチフスになり、ハワースに送り返されてから約1か月後に亡くなった。マライアが死んだときシャーロットとエミリはカウアン・ブリッジにいたので、マライアの臨終には立ち会うことはできなかった。しかしハワースにいたブランウェルは末妹のアンとともに姉のマライアの死に直面した。母親の死はおぼろげにしか覚えていなかったであろうが、マライアの死は彼の心に深く刻み込まれた。普段は、軽率で放蕩三昧に見えるブランウェルだったが、マライアの死以降、彼の心はつねに癒されることのない深い悲しみの底に陥っていたのである。

ブランウェルはペルソナをとおして「きみは逝ってしまったが、ぼくは残されて嘆いている」(Poems 169. 1)と語っている。ブランウェルはマライアにもう会えないことを嘆くとともに、罪もないマライアが死んでいったことへの憤りをどこに向けてよいのかわからずにいた。またブランウェルは「メアリの祈り」(Poems 186)という詩のなかで、「わたくしのことを忘れないでください」(Poems 186. 1, 5, 16)

とメアりに3回も繰り返し言わせている。年月とともに姉マライアの記憶が遠くなっていくことを恐れ、メアりにこのように言わせることで、マライアの記憶を決して忘れてはならないとブランウェルは自分自身に言い聞かせていたように思われる。つまりブランウェルはマライアを忘れてしまうことに罪の意識さえ感じ、ペルソナに「わたくしのことを忘れないでください」(Poems 186. 1, 5, 16)と呪文のように唱えさせていたのかもしれない。

マライアを忘れるのではないかという恐怖は彼が子どもから大人に変化していくことの恐れでもあるように思われる。ブランウェルは「キャロラインの祈り」(Poems 225-26)という詩のなかで、わたしは「無邪気な子どもではありません」(Poems 225. 10)と謳っている。マライアは彼の心のなかではいつまでも子どものままだったが、ブランウェルはマライアのように子どものままでいることは許されない。マライアはブランウェルからどんどん遠くなっていくばかりである。そして現実を見れば、家庭教師も鉄道駅員もうまくいかず、いまだに画家にも詩人にもなっていない自分に気づかされるのである。

ブランウェルは神に救いを求め、神の存在を信じたかった。しかしマライアを失ったときから、彼は神を信じることができなくなっていた。無垢なマライアに何の落ち度があったであろうか。神は幼いマライアの命さえも奪ってしまったのだ。25歳になると、ブランウェルは神に対してますます懐疑的になり、ペルソナ、アザレルに「神などないのだ」(Poems 233. 190)、「人間が神を作るといふことだ——神が人間を作るのではない」(Poems 233. 223)と叫ばせている。

ブランウェルは神が不条理の世界に人間を置き、なぜ苦しめるのか理解できなかった。母を失い、姉を失い、こうした現実を神はどう見ているのか、彼は神に問い続けていた。その結果彼が出した結論は「神などないのだ」(Poems 233. 190)だったのである。

4. ギヤスケルが描くブランウェルの死

なぜマライアが死ななければならなかったのか、この問いに答えてくれる神もなく、ブランウェルは現実の生活に向かい合っていかに得なかった。妹アンの紹介で彼は家庭教師になるが、ここでもまた雇い主の妻、ロビンソン夫人とスキャンダルを起こし、解雇される。

ギヤスケルはブランウェルの死を次のように述べている。

I have heard, from one who attended Branwell in his last illness, that he resolved on standing up to die. He had repeatedly said, that as long as there was life there was strength of will to do what it chose; and when the last agony came on, he insisted in assuming the position just mentioned. I have previously stated, that when his fatal attack came on, his pockets were found filled with old letters from the woman to whom he was attached. (2: 353)

ギヤスケルは、ブランウェルが死ぬとき、彼のポケットはロビンソン夫人からの手紙でいっぱいだったと述べている (2: 353)。レイランドはこの事実をブランウェルの世話をしていたマーサ・ブラウンに確かめたが、そのようなことはなかったと述べている (2: 284)。またブランウェルが立って死ぬと言ったこともギヤスケルの誇張であり、ブランウェルは父親の腕の中で死んだとレイランドは反論している (2: 279-80)。ギヤスケルがブランウェルの物語をドラマチックに仕上げるために、幾分飾り立てたという可能性はある。だがブランウェルの死についてどちらの主張が正しいかはわからない。わたしが強調したい点は、ブランウェルが絶望したのはロビンソン夫人に失恋したことだけが原因ではなかったということである。なぜならブランウェルはロビンソン夫人に捨てられても、それほど落胆していなかったからである。ブランウェルはロビンソン夫人に失恋すると、寺男のジョン・ブラウンとともに 1845 年 7 月 29 日から 8 月 3 日までリバプール、北ウエールズへ傷心旅行に出かけている。そのときブランウェルは「ペンメンマウア」(*Poems* 276-78) という詩を旅先で書いている。彼は「いまぼくが嘆いている悲しみに怯まず立ち向かえ／嵐のときも 晴れのときも 聳えていよ 不動のペンメンマウアのように」(*Poems* 277-78. 81-83) と謳っている。この詩には失恋した男の悲壮感はなく、それどころか悲しみに浸っている暇などないという前向きな姿勢が力強く生き生きと示されているのである。

ロビンソン夫人に失恋してからも、創作意欲は衰えず、詩を書き続けていたということは、ブランウェルがすっかり自暴自棄になっていたわけではないということを示している。少なくともこの時点で彼は失恋の感傷にひたるところか、さらに新たな境地を開こうとしていたのである。1845 年 9 月 10 日レイランド宛の手紙において「三巻本の小説に没頭していました——そのうち一巻は完成しました」(*Leyland* 2: 83) と述べている。彼はブロンテ姉妹よりも早く小説を書き始めていたということである。彼はまだまだ自分の人生をあきらめてはいなかった。最後のチ

ヤンスとばかりに、詩人あるいは小説家になろうともがいていたのである。

ロビンソン夫人への一方的な想いや何かを成し遂げたいという焦燥感からか、彼の飲酒癖が止まらなかったことも事実である。1845年11月4日付けのシャーロットの手紙ではブランウェルの仕事先が決まりそうだったが、結局以前のブランウェルの行ないが悪い印象を与え、その話は不首尾に終わったと伝えられている (*Letters* 1: 432)。ブロンテ姉妹の眼にはブランウェルは定職にもつかない怠け者としか見えなかったであろう。しかしこの手紙から4日後、ブランウェルは『ハリファックス・ガーディアン』に自作の詩「真の休息」(*Poems* 274)を発表している。酒飲みであることには変わりはないが、彼は少なくとも1847年6月5日まで創作を続けている (*Poems* 298)。

ところがその後彼はレイランドやジョン・ブラウンなどに手紙を書いたり、詩の断片を書き残してはいるが、作品として完成した詩を書いていない。それはなぜであろうか。ロビンソン氏が亡くなったら、ブランウェルはロビンソン夫人と結婚できると信じこんでいたようだが、ロビンソン夫人の遣いの者から結婚はできないということを告げられた。そのことは確かにブランウェルを絶望に追いやったであろう。それはシャーロットたちが詩集を出版しようとしていた時期でもあった。詩集がたった二冊しか売れなかった姉妹は、次に小説出版を計画していた。姉妹はこのことをブランウェルに告げる気もなかったし、告げるような状況ではなかったため、直接にはブランウェルに話していなかったようである。だが、ブランウェルがそれをまったく知らなかったといえるであろうか。

ギヤスケルは、実際シャーロットが出版社から返事が来ないことをブランウェルに相談し、ブランウェルからアドバイスを受けていることを述べながらも (2: 316)、ブランウェルが彼女たちの出版を知っていたかどうかについては言及していない。しかし1846年の詩集出版から1847年の小説出版までの間、ブロンテ姉妹は出版社と原稿のやりとりを頻繁にしていたので、司祭館には多くの郵便物が届いていた。おまけに当時の郵便事情では、郵便局員が郵便物を開封することは当たり前で、中身が丸見えになっていることは珍しいことではなかった。そうしたことからブランウェルが姉妹の郵便物を目にして、彼女たちが出版の準備をしている、あるいは出版をすでにしたということに気づくのは当然であった。

ブランウェルは子どもの頃から姉妹をリードして「グラス・タウン」や「アングリア」を創作してきた。シャーロットさえブランウェルの言うとおりに従っていた。ましてやエミリアやアンなど、ブランウェルの眼中にはなく、無の存在であった。だ

からこそ姉妹が自分に内緒で出版をしようとしているということに気づいたときの衝撃は大きかったはずである。折しもブランウェルも小説を書き始め、最後のチャンスに身を投じていたときであったから、なおさらであったであろう。

またアンがブランウェルとロビンソン夫人との一件を一部始終シャーロットに告白すると、シャーロットはブランウェルにいつそう冷たくなった。バーカーは、その頃シャーロット自身がエジェ氏への想いを断ち切れず悩んでいたため、ブランウェルに憐れみをよせる余裕がなかったのではないかと推測している(470-71)。そうした家の冷たい空気に加え、才能などないと見下していた姉妹に先を越されたことをブランウェルは知り、一人除け者にされ、言いようのない敗北を味わっていたであろう。彼の行ないは自業自得とはいえ、姉妹の裏切りにあい、ブランウェルはまさに「神などない」(*Poems* 233. 190)と叫んでいたにちがいないのである。

ギヤスケルはロビンソン夫人の仕打ちがブランウェルを死に追いやったとした。確かにロビンソン夫人と結婚できないという知らせはブランウェルに生きる気力を失わせたであろう。そこに追い打ちをかけるように、姉妹に敗北したことが彼をさらなる絶望に追いやり、生きていく力を失わせたのではないであろうか。彼はいったん画家になろうとしたが、さまざまな失敗を経て、詩人として大成する道を自力で切り開こうとしていた。著名な詩人に詩を書き送り、新聞、雑誌に投稿し、酒やギャンブルの深みにはまりながらも、彼は詩人として成功することにより、何とか這い上がろうと努力していた。自作の詩が地方新聞などに取り上げられたときには、ブランウェルは手ごたえを感じ、希望を見出していたにちがいない。ところがブロンテ姉妹が自分よりも先んじて詩集を出版し、さらには小説を出版しようとしていることを知ったとすれば、これまで誰よりも自分の才能がもっとも優れていると感じていたブランウェルにとって、これ以上の屈辱はなかったであろう。彼は彼の敗北を悟ったのだ。だからこそ、彼はもう詩を書くことができなくなった。ロビンソン夫人を失い、ブロンテ姉妹に先を越され、神のいないこの世界に絶望し、死んでいったのである。

伝記というジャンルはフィクションとノン・フィクションの狭間で揺れ動いている。ギヤスケルはブランウェルを救いようのない放蕩息子として描いた。それはギヤスケルが見た真実ではあるが、ブランウェルの一面にすぎない。決してブランウェルのすべてではないのである。

注

本稿は第26回日本ギヤスケル協会例会（2014年6月7日、於アルカディア市ヶ谷）における研究発表「ギヤスケルが描くブランウェルの死」に加筆、訂正したものである。

引用文献

- Barker, Juliet. *The Brontës*. London: Weidenfield and Nicolson, 1994.
- Gaskell, Elizabeth C. *The Life of Charlotte Brontë*. 2 vols. Penguin Books, 1975.
- Grundy, Francis H. *Pictures of the Past :Memories of Men I Have Met and Places I Have Seen*. London: Griffith and Farran, 1879.
- Leyland, Francis A. *The Brontë Family with Reference to Patrick Branwell Brontë*. 2 vols. London: Hurst and Blackett Publishers, 1886.
- Miller, Lucasta. *The Brontë Myth*. London: Vintage, 2002.
- Neufeldt, Victor A. ed. *The Poems of Patrick Branwell Brontë*. New York and London: Garland Publishing, Inc., 1990.
- Reid, T. Wemyss. *Charlotte Brontë :A Monograph*. London: Macmillan and Co., 1877.
- Robinson, Mary. *Emily Brontë*. London: W. H. Allen and Co., 1883.
- Smith, Margaret, ed. Vol. I of *The Letters of Charlotte Brontë with a Selection of Letters by Family and Friends*. 2 vols. Oxford: Clarendon Press, 2000.
- Whitehead, Barbara. *Charlotte Brontë and her 'dearest Nell.'* Otley: Smith Settle, 1993.

(静岡英和学院大学短期大学部教授)

Abstract

The Cause of Branwell's Death

Hisae ASHIZAWA

According to Gaskell's *The Life of Charlotte Brontë*, having his heart broken by Mrs Robinson, Lady Scott, drove Branwell to give up on life. In reality, he went to Wales on a trip to relieve his grief, accompanying the sexton, John Brown. However, he was powerful and strong in mind as can be seen in the poem, 'Penmaenmauwr' which he wrote during his visit to Wales. The poem shows that he was never defeated by his unrequited love for Mrs Robinson, contrary to Gaskell's description. Because Gaskell was inclined to exaggerate the tragic of events, there is the possibility that Gaskell embellished the truth.

What could be the cause of Branwell's death then? I suppose that the instigation of Branwell's death could be the Brontë sisters' betrayal. Although Branwell did not hear of the sisters' plan to write novels, Charlotte asked him why there had been no answer from the publisher. Charlotte had consulted Branwell since he had the experience of contributing poems to publishers. Therefore Branwell was sure to have known of their starting literary careers, no matter how the sisters may have tried to keep it secret.

What makes Branwell despair the most, is being forced to recognize that his sisters' abilities surpassed his own. When he was a child, Branwell was a star of hope among the Brontës, because he was the only boy. He himself saw his sisters as mere 'nothingness'. As he grew, he became indulged in heavy drinking and gambling. He became more of a troublemaker than a star of hope for the family. Still, he never gave up his dream of being a successful writer, and kept writing poems until he learned of his sisters' success. Finally, after he was overwhelmingly beaten by his sisters, he abandoned his life. That is to say, the silent insult threw him into depression and death.